Messenger

Vol. 61

メッセンジャー

あのときがあって、今がある。
そして、未来がある。

～ 陶芸、絵画、短歌、音楽でがんを乗り越えた人たち ～

芸術がいのちを輝かす

☆特別インタビュー　塩絵作家・大腸がん経験者　寺田のり子（てらだ）
♪インタビュー　杉浦貴之

感謝と信念が奇跡を起こす

余命4か月の大腸がんから30年経過。糖尿病による失明の危機、がん再発を乗り越えてきた軌跡と奇跡。また、たくさんの奇跡を起こす塩絵とは？

寺田のり子（てらだのりこ）
エンゼルメイクを開発したことがきっかけで、日本テレビ『おもいッきりテレビ』で準レギュラーとして4年間出演。30年前、大腸がんで余命4か月の宣言を受けるも、1年後にがんが消失。2011年、天然塩を配合した塩絵の具を使う"塩絵"を開発。現在は塩絵で兵庫・東京を拠点に全国で教室および指導活動を展開中。

■色もバランスよく

杉浦　今日は寺田のり子先生の東京のサロンにお邪魔しております。のり子先生のことは、高松で僕のトーク&ライブを主催してくださった住田伊津美さんから聞いておりまして、彼女は「塩絵ってすごいんですよ。さらに創始者の寺田のり子先生が本当に素敵なんです」と言われていました。

寺田　住田さんは高松で塩絵の個展なども企画してくださっていますね。

杉浦　はい。高松でのトーク&ライブのときも1週間後に塩絵の個展があるということで準備をされていました。今回のり子先生とつながったのは『統合医療でがんに克つ』という、がん患者さんのための雑誌がきっかけです。それで、2022年4月号にのり子先生の記事が掲載されていて、その記事にとても感銘を受けて、僕がぜひお会いしたいとお願いして今日の日が実現しています。奇遇だったのが、のり子先生が僕の父と同じ年だったことで…。

寺田　そこまで言ったらあきませんって（笑）。

杉浦　あっ、それはたいへん失礼しました！いや全然見えないですよね。実年齢を知っているんですけど、本当にお若くて！色の力や塩絵の力もすごくアンチエイジングにもなっているんじゃないかなと。

寺田　そう思います。色は意識して取り入れてほしいですね。服の色を変えるだけで、部屋の中の模様替えをするだけで、本当に健康になる人もいます。病院で2年間治療を受けていても全然よくならなくて、色を変えただけで元気になったという方もいるんです。色には一つ一つの働きがあって、エネルギーがあって、私たちの体を動かしていく、刺激を与えてくれるという働きがあることを知ってほしいんです。ただ、色には二面性があります。赤はエネルギーがあって元気が出たり、アグレッシブな心になったり、やる気や闘争心が出てきたり、成功に導いてくれたりという感覚を皆さん持っていると思うんですが、反面、赤ばかり着ている人は怒りっぽくなったり、キレやすくなったり、事故を起こしやすくなったりということもあります。

杉浦　プラスの裏にマイナス面もあるんですね。

寺田　だから色の取り過ぎというのはよくないですし、1色だけ取って元気になろうとしてもそうはいかないのです。私たち人間は生きていくのに、タンパク質、ビタミンC、ミネラルなど、バランスよく栄養素を摂らないといけませんよね。だから、色の一つ一つの効能を知って、バランスよく上手に取り入れていくことが大事です。それが色彩療法の基本であり、塩絵につながっていくわけです。

■体より仕事

杉浦　最初にのり子先生のがん経験についてお聞きしたいです。

寺田　もう30年ぐらい前になるんですけれど、私は大腸がんだったんです。便秘と下痢を繰り返すようになって、息をするのもしんどくなってきて、病院に行って精密検査をしてもらったら、「あなたの体はもうとてもじゃないけど耐えられないところまで来ています。もしこのまま倒れたらもう救急車も間に合いませんよ」と言われて。何のことかさっぱりわからなかったんで

すが、よくよく聞いたらがんになっているということで…。

杉浦　それですぐに入院になるんですか？

寺田　すぐに入院ということだったんですけど、テレビに出たり、講演したりと忙しくしていた時期で、急に言われても仕事のスケジュールが1年間びっしり詰まっていて断るわけにはいかず、「仕事をさせてください」と先生に言いました。そしたら、「あなたは体と仕事とどちらが大事なんですか？」と言われ、「仕事です！」と即答いたしまして。

杉浦　普通ではないですね（笑）。

寺田　それで私は「ちょっとトイレに行かせてください」と言って、病院から逃げてきてしまいました。絶対に診断が間違っていると思って、友人の旦那さまが医師だったので、その方に相談に行きました。自分のこととして相談するとまた病院に連れていかれると思い、大切な友人のことにして話しました。病院に行った状況や精密検査の結果を説明すると、その先生は「のり子さん、残念だけどその友人はもう助からないよ。だから、そのお友だちが行きたいというところに連れていってあげなさい」とおっしゃるんです。それで「どうしてですか？」と聞いたら、「もうその状態だったら余命4か月。がんの進行している状況と体の状態を考えると、治療をしてもかえって余命を縮める可能性もあります。何もしないほうがいいかもしれません」と。

がんの真っ只中のとき

杉浦　その後どのように行動されたんですか？

寺田　どうせ4か月が私の寿命なのであれば、人に役に立って死にたい、徹底的に私のやりたいようにやってやろうと思って、病院には行かず、この体で1年間かけて日本全国を講演して回ろうと決めました。

杉浦　これはすごい。皆さんは真似されませんように。体はどうなっていくのでしょうか？

寺田　黒いタール便も出ていましたし、何せ余命4か月と言われた体ですから、動いていてもたいへんだったんです。ある日、講演を終えて宿泊先のホテル戻ると、トイレで大出血を起こしてしまいました。「もし体に何かあったときは救急車が間に合わない」と言われたのはこのことだったんだと思いながら、だんだん意識が遠のいていきました。それで気を失いながら、もうこれでダメなんだと、子どもたちにも会えないんだと思っていると、お花畑や川が出てきて、これが三途の川なんだと冷静に考えている自分もいました。「きれいなお花だな、空気が澄んでいるな」と思っていると、今度は突然大きな声で「感謝をしろ！ありがたいと思え！」という声が聞こえてきたのです。そして、「お前の今までのマイナス思考、それを血で流しているんだ」と続きます。畳みかけるように「ありがたいと思え！ありがたいと思え！ありがたいと唱えろ！」と言われるので、「ああ、そうか」と納得しました。

杉浦　そんな意識の中で納得？

寺田　確かに私はマイナス志向がすごく強くて、自分のすることに自信がないから、「できない、ダメだ、無理だ」と心の中でいつも自分を否定していたんです。気を失いかけている中、そういうところから病気になったんだなとわかるわけです。それで「ありがたい、ありがたい、ありがたい」と心の中で何十回も唱えました。それでハッと気がついたとき、出血が止まっていたんです。普通は大出血を起こしているから貧血を起こして倒れるじゃないですか。違うんです。すごく体が軽くて、本当に清々（すがすが）しい気持ちになりました。そして汚れたズボンを洗って、次の日も講演に行ったんです。

杉浦　そんなことができるんですね。

寺田　動けることが楽しくて仕方なかったです。でも、タール便が出ている状態は続いていて、最後の東京の講演に向かう新幹線の中でついに嘔吐が始まったんです。東京駅に着いても歩けず、ゴミ箱に顔を突っ込んで吐いているわけです。これはちょっと危ないと思って、通る人を捕まえて、救急車を呼んでもらい病院に運ばれたんです。検査すると「内臓が動いてない。これは危険な状態だ。動いたら絶対死ぬ」という診断が出て、すぐ点滴を打たれたんです。「先生、すみません。明日講演があるんです。断れないんです」と言ったら、「あなたは動いたら死んでしまうんだよ」と言われて、「わかりました。じゃあ主催者に電話します」と言って電話をしたんです。

杉浦　やっと休めるんですか？

寺田　いや、主催者は「あなたの代わりはいないんです。点滴を打って来てください」と。「すみません、動けないんです。動いたら死ぬと言われているんです」と言っても、「大丈夫です。必ず来てください」と。

杉浦　そんな主催者さん、あまりいないですよね。

寺田　鬼かと思いました！２０００人の講演でしたし、芸能界とかテレビはそんな世界だったと思います。会場に着くと、お客さんがいっぱい来ているわけです。そのとき初めてわかったんです。私はこうやってお金をいただいて講演している身なのに、自分の体の管理ができてなかったと。主催者が悪いんじゃない、悪いのは私なんだと。これは絶対に1時間やり通そうと思

い、舞台までは抱いて連れていってもらいました。

杉浦　講演を待っている人を見て何かスイッチが入ったんですね。

寺田　はい。「寺田のり子先生お願いします」と言われたとき、タッタッタッタと自分で歩いていって「皆さんお待たせいたしました」と、普通に話し始めることができたんです。それで1時間の講演が終わると、なんと講演なのにアンコールが鳴り止まないんです！こんなことは初めてでした。そしたら司会の方が「先生、申し訳ありません、あと1時間お願いします」と言うんです。私、話をしながら死ぬのかなと思ったんですけど、なんとかやりきったのです。

杉浦　プロの魂ですね。体はどうなったのですか？

寺田　1か月寝込んだら動けるようになって、また講演を始めました。

杉浦　考えられないです。またご自身の体調に対し、どんな気持ちでいたのですか？

寺田　他人が自分の命を決めるものじゃない、私は私で自分の命を決めるんだと思っていて、私は日本全国を講演して回って死ぬと決めていました。それで1年間生き延びて、家に帰ったとき、タール便がバナナのような便になっていたんです。もうこれは黄金に輝いていて、「見て！見て！バナナ便が出たよ！」と喜んで夫に見せましたね（笑）。

ご主人の白川鳳胤（たかつぐ）さんと

■転機

杉浦　バナナ便が出て体調はよくなっていくのですか。

寺田　はい。がんは克服できたと思ったんですが、10年以上経って、今度は糖尿病と診断されてしまいました。それもかなり進んでいて、右目は失明、左目がかろうじて0．02という状態で、余命は5年くらいと言われました。歩くこともできないくらい体調も悪化していたのです。

杉浦　がんはよくなったのに、今度は糖尿病とは。

寺田　このときも病院にはいかず、家でなんとか色彩療法を教えて過ごしておりました。しかし、余命1年くらいとなったとき、家で倒れてしまい、病院に担ぎ込まれて検査をすると、がんが再発していることがわかりました。

杉浦　さすがに治療が始まっていくのでしょうか？

寺田　いえ、始まらないんです(笑)。ちょうどこのとき、入江富美子監督の『光彩～ひかり～の奇跡』という映画の取材が進んでいました。そんなある日、入江監督からかっこちゃん（山元加津子さん）の講演会に誘われました(2006年6月)。このとき、難病で亡くなった少女・雪絵ちゃんの話を聞き、雪絵ちゃんが生前に残した詩「ありがとう」と出合いました。かっこちゃんがその詩を朗読すると涙があふれました。

杉浦　どんな言葉に感動したのでしょうか？

寺田　「今まで見えにくい目が一生懸命見よう、見ようとしてくれて、私を喜ばせてくれた。足もそう。私のために信じられないほど歩いてくれた。私を一日でも長く喜ばせようとして、目も足もがんばってくれた」、そんな言葉でした。私は逆に、これまで「なんで見えんようになったん？なんで歩けんようになったん？」と自分を責めてばかりいました。雪絵ちゃんの言葉を聞き、「私は自分の体に感謝していたかな？目に感謝していたかな？足に感謝していたかな？」と思ったんです。

杉浦　それは大きな気づきだったのですね。

寺田　これまでがんばって、努力して人生を切り開いてきました。でも、病気の自分を自分自身がいじめていたと気づいたのです。人を癒すために、体に鞭を打ち、ひたすらがんばり続けてきたのです。だから、今の自分に感謝することから始めようと思いました。残された命で、色を使った「光の絵」を描きたいという気持ちも湧き上がってきましたね。

杉浦　絵のことは後で聞きますね。それでがんの再発はどうなったのですか？

寺田　胃から腸にかけてカメラを通して検査したのですが、がんは見つからなかったんです。以前のMRIでは影が写っていたので、先生が「おかしい、絶対あるはずだ。もう一回調べさせてくれ」と言ってきたのですが、「いや、調べなくていいです。このまま死なせてください」と断りました。

杉浦　奇跡が続くんですね。

寺田　まだまだ続くんです！この入院のおかげで、先生が「あ、目の検査をするのを忘れていた」と言われ、それで眼科に回してくださったんです。いろんな検査をしたら、「99％はよくならないけど、1％の確率があるなら手術してみませんか？」とおっしゃってくださったんです。それで、「見えなくて元々だからお願いします」と。白内障、網膜剥離、眼底出血、黄斑編成症、飛蚊症…たくさんの病名が付きました。

杉浦　それでどうなったのですか？

寺田　眼帯が取れたとき、見えたんです！失明していた右目の視力が0．4になっていて、0．02だった左目

の視力は1.0になっていたんです。がんが見つからなかったときも大騒ぎでしたが、眼科でも「奇跡が起こりました！　彼女の目が見えるようになりました！」とまた大騒ぎになりました。ついでに絶対に治らないと言われていた黄斑変性症まで治ってしまっていました。病院では「あなたの体は普通の人と違うから、死ぬまで診察をさせてほしい」と言われてずっと通っています。

杉浦　常識を超えていますからね。がんや糖尿病は今、どういう状態ですか。

寺田　糖尿病に関してはインスリンを打っています。がんのほうは腫瘍マーカーが通常より高いので、どこかにあるとは言われています。

のり子先生の東京のサロンでインタビュー

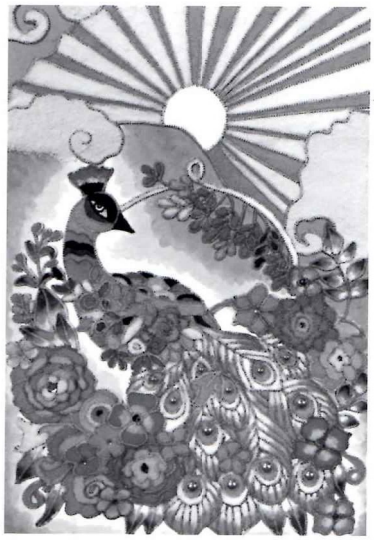
■塩絵の誕生

杉浦　のり子先生のオリジナルである塩絵はどのように開発されたのでしょうか。

寺田　画家でもある夫の白川鳳胤（たかつぐ）が、先ほど私がお話しした「光の絵」を描いていました。私も含め、多くの人が「光の絵」に助けられていて、もっとたくさんの人を救えないかと思っていたら、あるとき、絵の具に塩を混ぜてみようと思いついたのです。人間には元々天から自然治癒力が与えられて、それを引き出す存在も自然界にはあります。それが塩だと思ったのです。2年くらい試行錯誤して、天然の塩と絵の具、そしていろんな調合材を混ぜて、2011年5月、塩の絵の具が完成しました。それで塩絵を描き始めて、自分の体の調子がどんどんよくなっていきました。

杉浦　のり子先生自身が最初に体感されたのですね。絵の具に塩を混ぜることがなぜいいのですか？

寺田　塩は命の源であり、塩がなければ人間は生きていけませんよね。また体内に溜まっている毒素を排泄させ、健康で長生きできるのも塩の働きが大きく役に立っています。その上、塩は浄化の力が大きくて、色のエネルギーとコラボさせると、これまでにない心身の浄化ができる絵になると確信して作りました。マイナス思考の人が塩の力で浄化され、だんだんとクリアになっていき、さらに色の力でエネルギーが高まるから相乗効果となるのです。だから塩絵をもっと広げていって、家族の中で一人塩絵が描けたり、一家に一つ塩絵が飾られるようになったりすると世の中平和になるんじゃないかなと、大きな夢を持っています。



寺田のり子先生作
（カラーの塩絵作品は裏表紙に）

杉浦　どんどん全国に広がっていっていますよね。その中で、塩絵で体調が回復されたり、奇跡を起こされたりした方の例を教えてもらえますか？

寺田　私がどんどん元気になっていくから、これは人に伝えてもいいと思って、初めて地方に出たのが6年前で、場所は香川県だったのです。そのとき企画してくれたのが香西めぐみさんで、旦那様の弘さんが重度の脳梗塞を起こしていたんです。弘さん、奇跡的に命は助かったものの、私が初めて会ったときは、よだれが出て、言葉もうまく出ず、意思の疎通も難しいという、本当にたいへんな状態でした。でも、その彼をジーッと見たとき、塩絵を使ったらもっとよくなると思って、めぐみさんも受け入れてくれて四国で塩絵が始まったんです。

杉浦　弘さんはその後、どうなるのですか？

寺田　最初は色鉛筆やクレパスを使い、だんだん手で描けるようになって、どんどんすごい絵を描けるようになっていきました。めぐみさんのサポートもすばらしくて、「一生歩けません」と医師からお墨付きを与えられていたのに、彼は3階の階段をひとりで上がっていけるようになったんです。

杉浦　それはすごいですね。

香西めぐみさんと香西弘さん

寺田　あと、18[※1]トリソミーという先天的な染色体異常を持って生まれたサクちゃんという子がいます。喋ることも、食べることも、歩くこともまったく何もできません。3歳まで生きるということ自体が奇跡だったのですが、サクちゃんはその3歳で塩絵を習いたいと伝えくれました。お母さんと一緒に指談（ゆびだん）で「サクちゃん、塩絵する？」と聞くと、「する」と答えるんです。それで塩絵を習い続けて、彼女は今8歳になって塩絵の認定講師でもあります。

杉浦　認定講師になれたんですか？

寺田　サクちゃんもお母さんといっしょに色の勉強を3日間しました。色が一つ一つ体の中にどのように影響を与えているのか、そしてその色によって私たちの感情がどのように動かされているかを学んでもらうのです。サクちゃんはすばらしい感性を持っているんです。「赤はどんなイメージですか？」と質問すると、皆さんはたいてい、マグロとか、トマトと答えます（笑）。でも、サクちゃんは「エネルギー・情熱・熱い」なんて答えるんです。何を聞いてもハイレベルな答えをするのがサクちゃんで、なんと4歳で世界最年少の塩絵認定講師、塩絵作家になりました。オーストラリアでサクちゃんの絵がポスターになったり、地域のイベントに呼ばれたり、作家としての活動も本物です。また、知り合いに病気の人が出るとサクちゃんが絵を描いて、その人がエネルギーをもらって元気になるということも起こっています。塩絵に触れて元気になったという話は数え切れないくらい私たちのもとに届きます。

塩絵認定講師、塩絵作家のサクちゃん

※1　出産まで至らないケースも多く、1年生存率は10％程度と考えられている。しかし、最近では新生児集中治療や心臓手術などの治療を積極的に行うことにより、徐々に生命予後は改善してきている。

■感謝と信念

杉浦　のり子先生は塩絵を通じてたくさんの奇跡を起こされていますが、それはのり子先生の心、思いも影響しているのではないかと思います。さかのぼりますが、のり子先生の息子さんは小さいころ、たいへんな交通事故に遭われたのですよね？

寺田　長男は5歳のときに交通事故に遭いました。かなりひどい事故で、病院に救急車で運ばれたのですが、医師から「助かる見込みはありません」と。脳が豆腐を2メートルの高さから落としたような状態で手の施しようがないと言われてしまいました。「手は尽くしますがお母さんあきらめてください」と言われ、息子は集中治療室に入りました。

杉浦　祈るしかないという状況でしょうか。

寺田　本当に恥ずかしいのですが、前の夫との夫婦生活はまるで地獄のようで、いつも泣きながら「死にたい、死にたい、一緒にお母さんと死んで」と言ってしまっていました。そんな苦しみの中で息子を育ててきたので、息子は私の笑顔を見たことがなかったんです。だから、この子が5歳でこのまま死んだら、お母さんはいつも泣いていたという記憶しか持たずに逝っちゃうと思いました。それはダメだと！なんとか私が笑顔で生きていた姿を見せたいと思いましたね。

杉浦　それで何をされたのですか？

寺田　いつ死ぬかわからない息子だから、私は病院のソファーで寝泊りしていました。それで少しでも徳を積んでおこうと、トイレの掃除をしたり、スリッパを並べたり、患者さんがいたら「がんばりましょうね」と声をかけたりしていました。何もしないでいるより、心が落ち着きました。

杉浦　なかなかできないことだと思います。息子さんに変化はありましたか？

寺田　1週間ぐらいして瞳孔が開いてしまいました。瞳孔が開くというのは脳の機能が停止しているということです。それが3日間続いた後、奇跡が起きたんです。4日目、看護師さんが「お母さん、来てください。息子さんが息をしているんです！」と。そして看護師さんが息子の名前を呼ぶと、「ウゥ…」と返事をするわけです。

杉浦　そんなことがあるんですね。

寺田　でも先生からは「お母さん、息子さんは一命をとりとめましたが、一生涯植物人間です。ずっと喋ることも、歩くこともできない、寝たきりの状態です」と言われたんです。それが1週間経ったときに息子が普通の病棟に移されたんです。よくなっているの？と思ったら、今度は「植物人間は逃れたけれど、半身麻

痺です。運動神経が切れているため、リハビリをしても絶対に治りません。この状態で連れて帰ってください」と言われてしまいました。

杉浦　医師の予想に反して、息子さんは回復しているに。それでどう答えたんですか？

寺田　私はもう泣いて先生に「お願いですからもう少し置いてください。リハビリしてください」と言いました。「無理なんです。抹消神経がズタズタになっている状態ですから。医学ではこれ以上は無理です」と。仕方なくその状態で息子を連れて帰りました。別の病院で診てもらっても「これはもう歩けるということはありません。あきらめてほしい」と言われます。

杉浦　普通ならあきらめてしまいそうですが。

寺田　私はあきらめませんでした。絶対に歩けるようになる、喋れるようになると思って、親子2人でリハビリを開始しました。当時アパートの5階に住んでいたので、毎日息子を歩かせるわけです。階段を一歩上がれたら「ワーッ、できた！すごい！」と褒めながら。そうして練習して、なんと歩けるようになったんです。しかし言葉はやっぱり「あー」とか「うー」とか、です。

杉浦　また医師の予想を超えていくのですね。

寺田　私も驚いているんです。でも次々と問題がやってきます。養護学校ではなく、普通の学校に行かせたのですが、脳の損傷がひどいため今言われたことが覚えられず、1分後には全部忘れているという状態。そうすると私は学校の先生から呼び出され、転校を勧められます。息子はいじめに遭うという日々。脳を損傷しているから、息子はそれがいじめとわからず、遊んでもらっていると思うわけです。それが救いでした。私はもう見ていて泣きます。だけど息子は学校に行くのが楽しくてしょうがなかったんです。

杉浦　見ているほうもつらいですね。

寺田　はい。それでなんとかしようと、夜中まで九九を教えるんです。でも、覚えられないから息子は泣くわけです。本当に親子で泣きながらやっていて、ふっとあるとき気づいたんです。この子の命が助かっただけでもすごいことなのに、私は勉強を教えてまともにしようとしている。なんて鬼みたいな親なんだろうと。それで息子に「もう勉強しなくていいよ。だけど、困っている人がいたら優しくしてあげてね。助けてあげてね」と言ったんです。ただそれだけ。そしたら、ここから息子がだんだん元気になっていったんです。

杉浦　どちらも愛だと思いますが、息子さんはうれしかったんですね。

寺田　6年生になったときに引っ越して、担任の先生に言ったんです。「どうぞ何か一つこの子ができたときに褒めてください。そうすれば自信ができてきっと前に進めると思うんです」と。先生は「お母さん、わかりました。一緒にやりましょう」と言ってくれて、息子を褒めてくれたんです。そしたら、本当に言葉が出てくるようになって、長い時間歩けるようにもなっていきました。

杉浦　褒めて自信を持たせることも大切なんですね。

寺田　中学に入りますが、テストは0点ばかりで、やっと点が取れても10点、20点…。20点取れたときは「すごい！20点取れたやん！」と褒めるくらいの学力でした。そんな息子がS高校に行くと言い出したんです！三者面談のときに先生から言われました。「お宅の息子さんの成績わかっていますよね」と、「はい、わかっています」「まずS高校に行くのは無理です。通る学校に行かせましょう」と言われるわけです。でも、息子はどうしてもこのS高校に行きたいと譲りません。

杉浦　強い意思があったんですね。

寺田　この子はずっと自分の意思を伝えられなくて、ずっと我慢してきて、やっと言葉が出てS高校に行きたいと言ったその気持ちを汲んであげなければいけないと思ったんです。息子に「受けていいよ。だけど、通らないかもしれないからそのときはわかっているね」と言うと、「うん」と言うんです。それで先生に「S高校にお願いします」と言ったら、「お母さん、試験に受からないことは火を見るよりあきらかです。こんな成績で高校に行かせると思うほうがおかしいんですよ」と言うから先生と大喧嘩になりました。息子が初めて自分の意思を出したんです。受けるか受けないかより、私はそのことが本当にうれしかったです。

杉浦　息子さんもうれしかったと思います。試験結果はどうしたか？

寺田　合格発表の当日、先生から電話がありました。もちろん通るはずないと思っているので、電話が鳴った瞬間、「落ちましたよ」の電話だと思いました。そう思い込んでいたら、先生が「お母さん、しっかり聞いてくださいよ。落ち着いて聞いてください。慌てなくていいんですよ」と先生がせかせかおっしゃるんです。「わかっています、先生、落ちたんでしょう？大丈夫です。ちゃんと心構えはできていますから心配しないでください」と言うと、「いや、違うんですよ。通ったんですよ！合格しています！」と言われるんです。最初はとても信じられませんでしたが、しばらくして正気に戻ると、うれしさがこみ上げてきました。

杉浦　ここまでできるようになるんですね。

寺田　私もすごいと思います。IQもいつの間にか正常範囲内の88になっていました。脳がダメージを受けて、喋るのも無理、歩くのも無理と言われていた息子が高校に行けるまでなったので、障がいのあるお子さんを持つ親御さんに伝えています。「大丈夫だよ」とその波動を言霊でちゃんと伝えれば、もっともっとよくなる、できるようになるよと。信念を持って、お子さんの魂に語りかけるんだよと。でも、多くの人は「そんな宗教みたいなことを言わないでください」と言われるんです。しかしそこで理解してくれたのが、18トリソミーで生まれたサクちゃんのお母さんだったんです。お母さんはサクちゃんが「病院で死ぬ」と言われても信じず、

信念を持って、よい言葉をかけ続けました。そんなサクちゃんは今8歳、大人気の塩絵作家です。そういったことが現実に起こっています。私自身も、大腸がんで余命4か月と言われたとき、他人に私の人生を決めてほしくない、自分の命は自分が決めるという信念を持っていました。

杉浦　僕も22年前に親だけ呼ばれて、「早くて半年、2年後の生存率は0％」という余命宣告がありました。そのとき母が「冗談じゃない。余命宣告は絶対には信じません」と言ってくれたんです。その思いは絶望の淵に沈みかけていた自分にちゃんと伝わってきました。信じる気持ちや祈りは脳の神経をつなぐとも言われていますし、僕は本当に生きる力をもらいました。

寺田　私も息子のときに思いました。絶対にこの子を死なせないと。瞳孔が3日間開いて、もう助かる見込みがないと言われた息子にも伝わったんだと思います。その息子は普通に社会人になって、結婚して、今55歳になっています。

息子さんが30歳のとき

杉浦　すごいですね。でもこれは誰にでも起こりうるということですよね。

寺田　私たちは自分で作った物差しで世の中を観ていることが多いと思うんです。だから私、塩絵を習いにきている生徒にも結構厳しいです。自分で壁を作って、「できない。ダメだ。そんなこと経験したことがありません。だからできません」と言う方が多いからです。「でも、それはあなたの感覚で言っているんだよね？やってみないことをなぜできないと決めるの？やってみてできなかったときに初めて言ってくれる？」と私は言います。奇跡を目の当たりにして「うらやましいわ」と言っているようじゃダメ。私だから奇跡が起きたんじゃなくて、みんなにも奇跡が起こせるすごい能力があるんです。それを体験してほしいなと思います。

杉浦　そのために信念が必要なんですね。自分を信じるほうが難しいんです。大切な人のことは信じられるんですけど、それと同じぐらい自分のことを信じられたらいいですね。

寺田　そうなんです。まず自分を信じることです。そして、自分はどこから命をもらっているのか。お父さん、お母さんからもらっていると思うから、小さく見ちゃうわけ。私の人生はこんなもんだなと決めてしまって、大きくなろうとしない。自分の持っている能力を出そうとしない。こんなところで収めようとしている。違います。宇宙を創造してくれた、地球を作ってくれた大いなる存在から、私たちひとりひとりが命をもらって、お父さん、お母さんを通して人間として生まれているわけです。私は特定の宗教に入っているわけではありません。呼び方はなんでもいいのです。私は「この宇宙を作ってくれた神様ありがとうございます」と感謝します。

杉浦　自分を存在せしめている大元に感謝し、その愛に守られ、計り知れない可能性を与えられていると信じることですね。

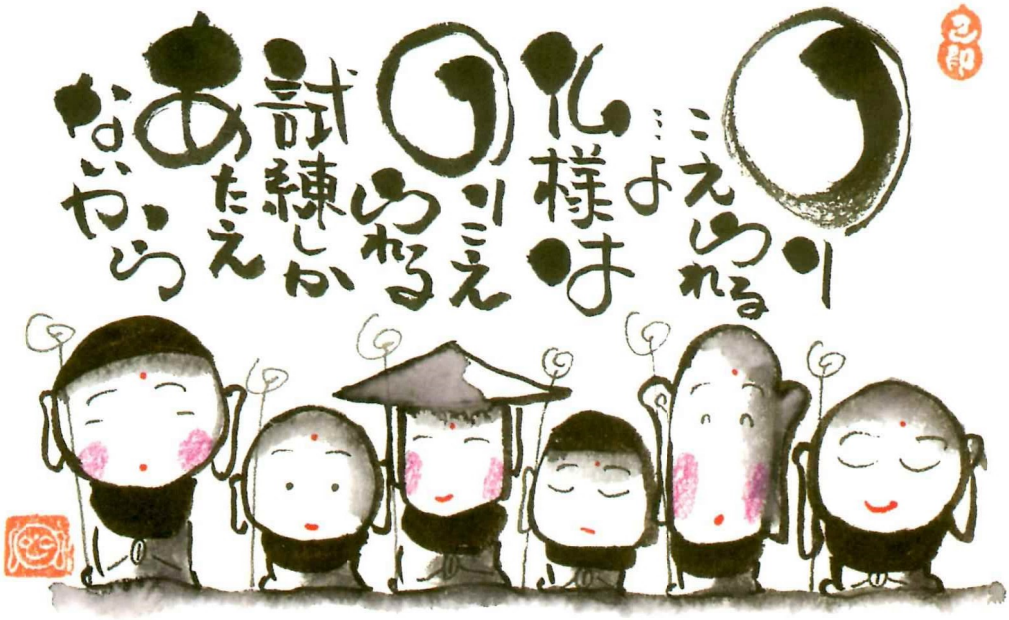
寺田　そこに手を合わせていくことで人生は大きく変わっていきます。自分の可能性を過小評価し、「あぁ、なんていう人生だったんだろう」と死ぬのではなくて、感謝し、信念を持って生き、「精いっぱい生きた。もう思い残すことはないぞ」と思って逝けたらすばらしいと思います。

杉浦　今日はすごくいろんなことを教えていただきました。命を大きく包んでくれるようなお話でした。本当に信じる気持ちは通じますし、自然治癒力、潜在能力、人間の力は、僕たちの想像を超えていて、それが不可能と思われていることを可能にしていくのだと思いました。僕も感謝し、自分と周りを信じ、さらに色をもっと活用して、自分の潜在能力を引き出していきたいと思います。

4月14日、東京・渋谷でのコラボイベントにて

寺田のり子公式ホームページ → https://teradanoriko.com/
寺田のり子先生の塩絵作品は裏表紙に掲載しています。

Messenger of the turning point



一般社団法人 日本己書道場　総師範　杉浦 正　作品

『祝福』　寺田のり子　作品

『希望の輝き』　寺田のり子　作品

Messenger vol.61
http://www.taka-messenger.com
★ 2023年6月発行（年２回発行）
発行人 ： 杉浦貴之　　印刷 ： 大日印刷（株）
愛知県岡崎市戸崎町牛転17-5-102　T･F 0564-64-2916
定価５００円
（本体４５４円）
TEL/FAX　0564-64-2916